スコットランド・西部島嶼地域 におけるクロフティング集落の 空間構成原理と持続性

SPATIAL CONSTRUCTION PRINCIPAL AND SUSTAINABILITY AT CROFTING VILLAGE IN WESTERN ISLANDS OF SCOTLAND

齋藤雪彦 ——— * 1

キーワード：
英国, スコットランド, クロフティング, 集落, 空間構成原理

Keywords:
United Kingdom, Scotland, Crofting, Settlement, Spatial construction
principal

Yukihiko SAITO ——— * 1

‘Crofting’ is the traditional tenancy system including traditional culture, land use system in Scotland. Farmers are called ‘Crofter’ renting land from land owners. Crofting village has similarity with mountainous villages in Japan which have a traditional bond, collective work, traditional way of thinking. The paper aim to clarify the present situation of crofting village in viewpoint of sustainability and spatial construction principal. The principal is that keeping fertility and equality among crofters which made spatial character of crofting village, whether principals of Japanese village tend to protect lands from disaster and utility of water supply in general.

1. はじめに

日本においては農村空間（里山）を「自然と共生する伝統的な知恵が集積された空間」と位置づけ、その空間構成およびその原理が体系的に研究されてきた^{注1)}。一方、こうした伝統的な知恵を海外へ紹介する試みから、海外における伝統的な知恵が集積された集落との共通性・類似性に着目し、その現代的な意味を問い直し、生物多様性や文化的景観、伝統的コミュニティの観点からその持続的保全を国際的な枠組みで進めていこうとする取り組みも見られる³⁾。こうした取り組みではアジア・アフリカ地域などの農村空間が注目されるが、欧州地域、特にエンクロージャーによる大地主制が早くから進んだ英国でこうした伝統的な知恵の集積された農村空間が注目されることは少ない。本編では、英国スコットランドの農村空間を空間構成原理という視点から分析し、自然と共生する伝統的な知恵が集積された空間にみる自然共生思想の国際的比較、考察のための基礎資料と位置付けたい。

本編の調査対象地域は、スコットランド・西部島嶼地域のクロフティング集落（Crofting Village）である。クロフティングとはスコットランドにおける18世紀から続く歴史的な小作制度であり、小作農をクロフター（Crofter）と言い、共有地での放牧（Common Grazing）を行う。農地の規模が小さいため歴史的に農業だけでは生計が成り立たず、漁業、手工業などに従事し、一方で共有の放牧地を持ち共同作業を行い、独自のコミュニティ組織や伝統的価値観が残存するなど、我が国の中山間地域における伝統的な集落との共通点が多い。また、スコットランドに伝統的なケルト文化が多く残る

地域であり、ゲール語をはじめ、伝統的な音楽やダンス、祭り、糸紬や編み物、羊の飼育法などが動態的に残る。またスコットランドは、独自の議会、法律を持ち、都市・森林管理においてもコミュニティの果たす役割が大きく、イングランドとは歴史的文化的に異なる点が多い。

日本の計画学分野においてスコットランドに関して、例えば村上による研究⁴⁾ ⁵⁾ などが見られる。一方、クロフティング集落の研究はニューカッスル大のマーク・シュックスミス教授による長期にわたる研究蓄積があり、特に現在の農業施策がクロフティングに対応していない実態を指摘し、生物多様性や文化保全の見地からクロフティング集落の価値を見直すように提言している⁶⁾。日本では農業経済学の分野で安藤がシュックスミス教授の文献を紹介しているが⁷⁾、空間的分析は行われておらず、従って空間計画学の分野ではほとんど紹介されてきておらず、従って、本報告でクロフティング集落の空間分析を行うことは一定の学術的意義を有すると考える。

また、農村計画学分野では、長年にわたり、集落の空間構成原理を明らかにし、文化的価値を提示し、開発のあり方に示唆を与えようとする研究が行われてきた^{注2)}。さらに近年では文化的景観の考え方が集落空間にも適用され、文化的景観の持つ意味を空間構成原理から考察する研究へと展開する研究、また海外の途上国における集落を対象とする研究も見られる¹⁰⁾ ¹¹⁾。本研究は、これらの研究の系譜に属するものである。

一方、英国では、広域的な土地利用を分析し計画に活かそうとする百メートル程度のメッシュでの景観特質評価（Landscape

^{*1} 千葉大学大学院園芸学研究科 准教授・博士（工学）
〒271-8510 松戸市松戸648）

^{*1} Assoc. Prof., Graduate School of Chiba Univ., Dr. Eng.

図1 スコットランドと調査対象地域の位置

表1 現地踏査対象集落

集落名	地域	空間類型	集落名	地域	空間類型
Camascross	スカイ島・ロカロッシュ	海岸並行	Mealabost Bhuirgh	ルイス島	海岸並行
Plockton	スカイ島・ロカロッシュ	海岸並行	Siabost bho Thuath	ルイス島	海岸垂直
Uig	スカイ島・ロカロッシュ	海岸並行	Dail Beag	ルイス島	海岸垂直
Totscore	スカイ島・ロカロッシュ	海岸垂直	Dail Mor	ルイス島	海岸垂直
Bornesketaig	スカイ島・ロカロッシュ	海岸垂直	Broch	ルイス島	海岸並行
Barmacqueen	スカイ島・ロカロッシュ	海岸垂直	Eanacleit	ルイス島	海岸並行
Stenscholl	スカイ島・ロカロッシュ	海岸並行	Miabhaig	ハリス島	海岸並行
Slipway	スカイ島・ロカロッシュ	海岸並行	Bun Abahinn Eadra	ハリス島	海岸並行
Mus Elishadder	スカイ島・ロカロッシュ	海岸並行	Na Buiurgh	ハリス島	海岸並行
Bru	ルイス島	海岸垂直	Northton	ハリス島	海岸並行
Barabhaslarch	ルイス島	海岸垂直	Lever Burgh	ハリス島	海岸並行
Baile an Truisei	ルイス島	海岸垂直	Seilebost	ハリス島	海岸並行
Siadar Uarach	ルイス島	海岸垂直			

注：空間類型は3章3.3に示すものだが、この2タイプに当てはまらない集落は本表から除外している

図2 Camascross 集落の概要

Character Assessment) に関わる研究や計画論が見られるが^{注3)}、わが国において行われる筆ごと、地片ごとに行われるような緻密な土地利用の分析はほとんど行われず、こうした成果を、英国の計画分野において、今後、報告することは、我が国の計画学的方法論を示す点で意義のあることと考える。つまり、本研究では、クロフティング集落の歴史的な文脈と現代的課題を整理し、その空間的特徴とその空間構成原理を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

図3 1803年当時のCamascross集落の古地図（Suzan Walker氏蔵）

本研究は既往研究^{8) 9) 10) 11)}と同様に、現地観察調査と地域関連組織代表者へのヒアリング調査を用いて、土地の空間的な特徴と使い方を元に、主に論理的蓋然性から空間を読み解き、その空間構成原理を明らかにしようとするものであり、一般的な客観的データに基づく論証型の研究（例えば、アンケート調査による統計分析など）とは方法論が異なるものである。

本調査は英国ニューカッスル大学農村経済研究所（Centre for Rural Economy）においてマーク・シュックスミス教授、カレン・スコット上級研究員へのヒアリング調査、文献調査^{6) 7)}を行い、伝統的な土地利用が多く見られるスカイ、ロカロッシュ、ルイス、ハリス地域を対象地とした。これを踏まえ、現地観察調査（表1）とクロフティング支援団体代表者らへのヒアリング調査を行った^{注4)}。

従って、本編では、クロフティング集落の i) 歴史的な成立と制度的、社会的な実態と課題を文献調査により明らかにし（3章 3.1）、ii) 空間的特徴と土地利用、管理の実態（3章 3.2）、iii) 空間構成原理を、現地踏査とヒアリング調査から明らかにし（3章 3.3）、最後に総合的な考察を行う（4章）。

3. 結果

3.1 クロフティング集落の歴史的背景と課題

スコットランドにおいて起きた反乱がカロードンの戦い(1746年)で鎮圧され、土着の氏族社会（Highlander）が解体され、ハイランド・クリアランスと呼ばれる大規模な住民の追い出しが行われた。これにより、無住地であった条件の悪い島しょ部、海岸部、高原・山間地域に人々は開墾して移り住むことになり、これがクロフティング集落の起源である^{6) 7)}。

一方、零細な農業に従事し、肥沃度の低い土地を管理し、同時に社会的弱者でもあるクロフターの権利を確保しようとする動きは、古くから見られ、1886年に制定されたクロフター法に遡るが、1973年のクロフティング改革法、1993年クロフター法（スコットランド政府）、2003年スコットランド土地改革法に継承される。

小作農の借地権の血縁者への相続、適正な小作料の維持が重要な権利であるが、さらに小作農が借地している土地を買い取る権利を保障している（1973年クロフティング改革法）。

図4 Plockton 集落の概要

写真1 Uig 集落の景観

写真2 Bru 集落の景観

図5 ルイス島南部の集落(The Ordnance Survey Landranger Map No. 13)

図-6 ルイス島北部の集落(The Ordnance Survey Landranger Map No. 8)

一方、地主が個人であると、彼らの個人的な事情や思惑に、クロフターが翻弄される可能性があるため、ナショナル・トラストなどの非営利組織や地域組織（Community Trust など）へと土地を移管し、賃貸関係を維持しようとする動きも広く見られる。つまり、コミュニティや非営利組織へ土地の所有権を移すことで、クロフティング集落の持続性を担保するものである^{注5)}。加えて、こうした組織は、雇用創出や安価な住宅の確保、観光振興といった地域振興^{注6)}や自然保護活動^{注7)}を行い、地域づくり組織としての役割も果たしている。例えば、Plockton 集落を含むロカロッシュ地域は、同地域のナショナル・トラストが地主であり、ハリス島北部では、Norh Harriss Trust が地主である^{注8)}。

一方では、日本の過疎地域のように農業条件・生活条件の悪さから、人口流出が起き、在住する住民の高齢化や小作者・外部所有者の不在により、耕作放棄地も増加する^{注9)}。また逆都市化現象（Counter Urbanization）により、流出層の家屋や農地が外部の富裕層に売却され、別荘地となる土地も散見される^{注10)}。これは、土地の売買や開発に制限の多い英国において、例外的にクロフターが借地権を有する土地を購入することができ、その後、外部の富裕層に売却することができるためである。特に本研究の対象地域は、観光地として有名な景勝地でもあり、この傾向が顕著である。これにより不動産価格の高騰が起き、地域の若年層の定住、新規営農者の参画を妨げる^{注11)}。さらに、近年は、コミュニティにも土地買収の権利を付与するが、耕作放棄や外部所有の動きは鎮静化していない。

また、一般的に条件不利地域であるクロフティング集落であるが、世帯あたりの面積規模が他のイングランド地域の集落に比べて小さく、EU の共通農業政策（条件不利地域補助金、直接支払い補助金）の枠組みにおいても、十分な保護が受けられないとの指摘がある^{注12)}。これを踏まえ、文化的景観や生物多様性の保全のような農業生産とは別の価値からクロフティング集落を保全するべきとの指摘がある。あるいは INTERREG など文化政策、地域政策への包摂なども保全の方向性として挙げられる。

3.2 クロフティング集落の土地利用と管理の実態

1) Camascross 集落

17 世紀から続く集落であり、おおむね、1-2 ha 程度の細長い短冊状の農地が海へと下降する斜面に延び、農地に隣接した斜面上部に宅地があり、この農地と宅地を一つの単位として海岸線に向か

図7 海岸並行型のモデル図

い平行に延びる（図2、図3）。人口は120人、クロフターは約60人であるが農地の2/3は耕作されていない。土地利用を見ると、農地と海岸の間は農地に適さない礫などの岩礁か砂浜である。また、宅地から丘陵の頂上部に向かって共有放牧地が広がる。図2に放棄地を示すが、管理するが耕作されず、芝生などの庭園的な管理がされている場所もある。住民の流出により耕作されない場合もあるが、住民は居住するが離農する場合が多い。また宅地化した農地のうち約半数は外部所有であり、内訳を見ると、デンマーク人、アメリカ在住のイギリス人、UAE在住のアラブ人など富裕層の別荘である。残りの約半分はクロフターの建てたアートスタジオやB&Bである。土地が痩せており、1-3年目野菜、4-7年目が牧草と約7年のローテーションにより耕作を継続する。コミュニティの集まりは毎週土曜日に地主の所有するホールで行う。共同作業の内容としては、夏の共有地への放牧、牛の乳しぼりなどである。また夏の放牧では1戸当たりの頭数制限などを放牧委員会というクロフターの営農組織で決める。日曜日に外出しないなどの宗教的な慣行があるが、近年は守らない住民も増えてきた。

2) Plockton 集落

18世紀から続く集落である。Camascross集落と同じく、2ha程度の短冊状の農地が海に向かい下降する斜面に沿って伸び、農地の上部の丘陵部には共有放牧地が広がる。宅地は短冊状の農地に隣接

図8 海岸垂直型のモデル図

するが、Camascrossと異なり、海に近い斜面の下部に防風林がありそのさらに下部に宅地が位置する。これは、丘陵部から海岸に向かって強風を避けるためである（図4）。

1970年代から観光活動が盛んになり、観光活動従事者（ホテル、B&Bの経営や勤務）が多く、人口は約500人だがクロフターは17戸に留まる。コミュニティの集まりは調査時点では年5-6回程度に減少、収穫祭を年1回教会で行う。Camascrossと異なり放棄された土地はほとんどない。クロフター同士の土地の貸し借りにより、放棄地を出さないように調整している。また、耕作を継続する理由を尋ねると、「先祖への敬意」や「農業を行う誇り」など、日本の農家と類似し、土地や先祖を自らのアイデンティティの一部と考える性向が確認される。また、農地は、野菜畑がほとんどなく、牧草地が中心に栽培される。地主は現在、ナショナル・トラストの土地管理会社（Balmacara Estate）であり、自然保護や地域振興の支援などの活動を行う。共有放牧地への頭数制限はあるが、共同作業は既がない（かつてはピートの掘り起こし作業や放牧作業などがあった）。農地の外部所有による宅地化はホテル1軒を除き見られない。Camascrossに比べると共同体として機能し、社会的絆が強く、耕作放棄や外部所有がほとんど見られない。日曜日に外出しないなどの宗教的な慣行があるが、近年は守らない住民も増えてきた。

3.3 クロフティング集落の空間構成原理

スカイ島・ロカロッシュ地域、ルイス島、ハリス島のクロフティング集落を踏査すると、以下のような空間構成の集落が多く見られる（表1再掲）。

まず、海岸線に向かって斜面が緩やかに落ち込んでいる地形では、海岸線に沿い家屋・農地が列状に形成される集落（図5、写真1参照、前節のCamascross, Plockton 集落が該当、ハリス島、スカイ島・ロカロッシュ地域に多く見られる）が見られ、海岸線と列の向きが並行なので、海岸並行型と呼称する（図7）。次に海岸線に向かって、川や谷、その間の細長い丘陵が直交する場合には、その細長い丘陵部の長辺に沿って家屋・農地が列状に形成される集落（図6、写真2参照、ルイス島に多く見られる）が見られ、海岸線と列が直交するので海岸垂直型と呼称する（図8）。地形が複雑な場合には、こうした規則性は見られず、また農地が斜面に沿って短冊状に列を形成するが宅地は別の領域に塊状に空間を形成する、あるいは内陸部では河川や湖などに沿って、宅地と農地が短冊状に延びるなどの例外はあるものの、特徴的なこの2タイプに着目して、空間構成原理を考察する。

また、日本の列状集落と同様に、各屋敷地に従属する農地は、屋敷地の列に直交する形で、屋敷地の背後に延びている。またこの列に沿い道路が伸びている。この屋敷地に接続する農地は In-Bye Land と呼ばれ、冬の間に家畜を放牧する、あるいは自家用の野菜畑とする場所であり、生活域農地と言える¹⁾。家畜は季節の春から夏の時期には共有牧草地に放牧する。共有牧草地は、集落から見ると海とは反対側の直上の山側にある。

さらにこうしたクロフティング集落の多くは、冬の間、地域によっては木も育たないような強風にさらされ、気温が低い農業条件が極端に悪い地域である。また、土地も苔が堆積し泥炭状となった酸性が強いピートと呼ばれる土壌であり、土地の肥沃度が極端に低い。

農家は、伝統的に海草を海岸から採取して、農地にすきこみ、肥料としていた。また同時に、海から運ばれてくる Shell Sand と呼ばれる貝殻などの残骸を多く含む砂が多いほど肥沃度が上がると言う。Shell Sand と Peat が混合した石灰岩を含む砂地を Mach（マッハ）と言い、生物多様性を担保する土地でもある。

共有牧草地は肥沃度が低く、雑草が繁茂する夏の時期にしか使用しないことで、荒地地となることを防いでいる。

つまり、海岸線に近く標高の低い農地ほど、海草を運びやすく、海から高潮等により打ち上げられる Shell Sand を含むことから、肥沃度という点で有利なことが分かる。地図で見ても、各島の中央の内陸部には集落はほとんど存在せず、海岸線に近い地域でしか伝統的な生業が成立しなかったことが分かる。

この肥沃度という観点から海岸並行型、海岸垂直型の空間的特徴を見てみると、海岸並行型では屋敷地、生活域農地（In-Bye Land）がセットなり海岸線に沿って並び、各戸の農家が、海岸線に近く標高の低い肥沃度の高い農地と海岸線から遠く標高の高い肥沃度の低い農地を含むため、農業条件に著しい格差がないことが分かる。同様に海岸垂直型においては各農家の生活域農地が尾根から谷部にかけて同じように存在し、標高の高く肥沃度の低い農地と標高の低く肥沃度の高い農地を含み、農業条件に著しい格差がないことが分かる。ただし、海岸並行型と比べると標高差では同じような条件であるが、海からの平面的な遠近という点で若干の差異がある。また、

丘陵の尾根部分は一般的に岩盤状になっており、植物の生育上不利なことから家屋が建てられる。また、地主から複数の小作農が土地を借りて住む特徴から、各農家の農業条件が著しく異なることなく、可能な限り農地の面積や日当たりばかりでなく、肥沃度も平等にする考え方により、海岸並行型と海岸垂直型の空間構成を説明することが可能である。

つまり、本対象地においては、肥沃度の地形的特徴を踏まえ、肥沃度の平等性を担保するようにして集落空間が構成されてきたことが分かる。

4. おわりに

本編では、ハイランド・クリアランスから現時点に至るクロフティング集落の歴史的文脈、現代における社会的課題を整理し、集落空間構成原理を明らかにした。つまり、集落空間構成原理という観点において、クロフティング集落では肥沃さを維持することと、肥沃さを農地間で平等にする原理で説明できる。また、厳格な放牧の頭数制限や7年にも渡る土地のローテーションなどが集落の慣行的行為にも土地の肥沃さを維持する重要性が垣間見られる。また冬の強風を避けるような家屋の配置を行い、また、打ち上げられた海草を肥料として使用するなど、環境と共生する伝統的な知恵が集積された空間であると言える。さらに、農業環境を維持することで絶滅危惧種等の貴重な生物層の環境を維持している。

加えて、夏の共有地での羊の放牧作業、羊の毛刈り、ピート掘りなどが行われ、伝統的な共同作業が見られる。また日本の手間替え（結い）と同様、日常的な農作業を手伝いあう慣習も存在し、コミュニティによる定期的な会合も行われている。

社会的課題については、高齢化や若年層の流出と耕作放棄が見られ、より一般的な規模の大きい農地を基準にした農業施策が小規模な農地を持つ条件不利地域に合致していないことが確認される。一方で、スコットランドでは逆都市化現象が進み、高齢富裕層の流入が見られることはわが国の過疎化が進行する中山間地域とは大きく異なる点である。

集落空間は、生物多様性を担保する空間であり、また同時に自然と共生する知恵が空間構成に現れる点など、その自然的価値、文化的価値に着目し、農業政策との齟齬の解消を図ろうとする動きは、農村・農業行政と自然保護行政、文化行政がタテ割りの日本の農村施策に示唆を与えるものである。同時に、伝統的なクロフティングに関わる規制や登録制度が複雑で、効率的な地域振興業務の妨げとなる点は、伝統的な事柄、仕組みを維持しながら、新しい展開を図っていく困難さを示すものである。

また、伝統的な社会とその仕組みによって、クロフティングではない地域よりも人口減少や経済の衰退が相対的に小さいことは、農業の生産性向上だけでなく、伝統的な社会維持が、地域社会の維持に資する可能性があるとの知見が得られ、歴史的町並み保全における論点との類似性が示唆される。

謝辞 (Acknowledgement)

調査企画、調整、考察等アドバイスを頂いた、Newcastle University Centre for Rural Economy の Professor Mark Shucksmith、Dr. Menelaos Gkartzios、Dr. Karen Scott、Dr. Carmen Hubbard の各氏に感謝を捧げる (I want to express my special gratitude to CRE people above)。

注釈

- 1) 例えば、文献1) 2) のように日本建築学会では、空間構成原理を研究課題として、環境共生の知恵を資産と位置づける活動を行ってきた。
- 2) 例えば文献8)、9) などの研究が挙げられ、また文献1) では、こうした集落空間構成原理を明らかにする意義や方法論について体系的に解説している。
- 3) 例えば、ニューカッスル大学農学部では、Landscape Character Assessment を使った土地利用分析の授業が行われている。
<https://www.ncl.ac.uk/module-catalogue/module.php?code=ACE2003> (2017年1月最終閲覧)
- 4) ヒアリング調査について対象者と実施日は以下の通りである。Susann Walker 氏 (スコットランドのクロフティング委員会委員、Camacross にて 2014.8.25 ヒアリング)、Sandra Homes 氏 (Highland and Islands Enterprise ハイランド地方企業公社職員、Plockton にて 2014.8.26 ヒアリング)、Alistair Scott 氏 (North Harris Trust 代表、Tarbert にて 2014.8.28 ヒアリング)、David Cameron (Community Land Trust 代表、Tarbert にて 2014.8.29 ヒアリング)、現地踏査は8月25日から29日のスカイ島、ルイス島、ハリス島の順序で行った。
- 5) スコットランド全域において地域組織が土地所有者(地主)となる事例は調査時点で52件にも上る(HIEのリーフレットによる。Highlands and Islands Enterprise: Community Land Ownership in the Highlands and Islands, Ashworth Map and Interpretation Ltd. 2014.3)。
- 6) 伝統的にクロフターは農業だけでは歴史的に生計が立てられず、家計収入に占める農業の割合は概ね30%以下であり、地域振興が強く求められる(文献6))。
- 7) クロフティング集落の耕作地では、セイヨウキンバイ、フクロソウ、イブキトラノオ、アザミなどの野草、シギ、チドリ、ウズラクイナ、ガチョウ、アジサシなどの生息域であり、EU 鳥類指令の特別保護地域重要植物地域になっている。一方で、例えば確認される34種の鳥類のうち、10種が数が減少し、16種が減少の危機にあり、保護活動が求められる地域でもある。
また、クロフティング集落では羊の飼育、糸紬、編み物といった文化的活動の維持が今も行われていて、農作業やコミュニティのミーティングを通じて、ゲール語の維持が行われていることが指摘される(文献6))。
- 8) こうした地主組織以外のクロフティング集落に関する組織として、スコットランド政府にはクロフティング委員会が設けられ、クロフティングに関わる規制や登録に関わる業務が行われる。伝統的な規制や登録業務が多く、地域振興等の地域に向き合う業務が十分機能していない。また、地域には地域クロフティング理事会在土地問題に関わる個々の案件を取り扱い(日本の農業委員会のような組織)、放牧委員会が行政との窓口の役割を果たしている(日本の地域生産者組合のような組織)。
- 9) 2008年の統計では、登録クロフターのうちルイス島で10.5%、スカイ島とロハルシュ地域で14%が不在耕作者となっている。また、クロフティング集落で、30ヘクタール以下の農家の1982年から2007年の経緯を見ると耕作地面積は49%減っ

ている。また生活域農地(インバイランド)での過放牧と共有地の過少放牧による荒廃が起きている(文献6,12))。

- 10) 2003年について Highland 地域では小作地の宅地への転用が87件申請、55件受理され、Comhairle nan Eilean Siar 地域では66件申請、62件受理となっている。またこのことを脱小作地化(De-Crofting)と呼称する。基本的には、脱小作地化された土地は、小作農から入札で外部の手に渡るので、新規営農者や若者は、別荘地を求める富裕層に太刀打ちできない(文献12))。
- 11) 2007年の住宅価格上昇率はスコットランドが英国の中で最も高く、特に農村地域は5年で2倍に上昇する。新規就農者について5年間住める家を提供する、共有地の一部を民間に開放し家を建てることも試行されている。安価な住宅供給の仕組みは、人口維持のために必要な施策であるが、財政削減の影響で、クロフティング集落向けの住宅ローンの制度が縮小する。新規営農者についてみると、1991年から761人が入植し、2007年時点で346人が残る(文献6))。
- 12) 農業補助金、特に直接支払い補助金や条件不利地域補助金では、これまでの歴史的な文脈(既得権)が新規参入を妨げていたり、零細農家が簡単に申請できるような単純な仕組みになっていない、短期間で仕組みが変わるなどの問題点が挙げられる。直接支払いは基本的に面積あたりに補助金を支払うので、零細農家であるクロフターには恩恵が少なく、牛をレンタルする補助や地域振興補助金(RD)の割合を高めることが求められている(文献6))。

参考文献

- 1) 日本建築学会編：図説集落、都市文化社、1989
- 2) 日本建築学会編：環境資産としての農山漁村、日本建築学会研究協議会資料、2003.9
- 3) Satoyama イニシアティブ国際パートナーシップ(環境省)
<http://satoyama-initiative.org/ja/partnership/> (2017年1月、最終閲覧確認)
- 4) 村上佳代：スコットランドの土地改革、都市計画学会論文集55(2)、82-、2006
- 5) 村上佳代、後藤春彦：英国の条件不利地域(Highlands and Islands)における地域づくりの民営化とその戦略、都市計画論文集35,949-954、2000
- 6) Committee of inquiry of crofting, Committee of inquiry on crofting final report, RR Donnelley, 2008
- 7) 安藤光義：スコットランドの小作農クロフター(Crofter)、英国版「百姓」が示唆するもの、土地と農業(43)、107-126、2013
- 8) 黒野弘靖、菊地成朋：列状村とその水系・ミチへの連関、日本建築学会計画系論文集520、213-217、1999.6
- 9) 山崎寿一、重村力：中久保集落における集落域の土地利用と土地割形式、日本建築学会計画系論文集443、133-141、1993.1
- 10) 森朋子：大字単位からみた五箇山の文化的景観の深層構造、都市計画論文集48(3)、579-584、2013.11
- 11) 飯田 晶子、野口 翠、大澤 啓志、石川 幹子、ミクロネシア島嶼パラオ共和国における集落の文化的景観に関する研究、都市計画論文集45(3)、97-102、2010.11
- 12) Crofting Commission: Crofting Commission Annual Report & Accounts 2013-2014, Crofting Commission, 2014
- 13) Jane Atterton, Terry Carroll and Nicora Thompson: Assessment of social capital on Rum and the small isles, Centre for Rural Economy, 2007.11

[2017年2月1日原稿受理 2017年5月8日採用決定]